

# 道徳通信

愛西市立八開中学校  
令和4年5月

📌 「生きている」ことの尊さとは ～道徳「命が生まれるそのときに」を通して考えました～

「いのちの音」は、お母さんのおなかの中にいたときから、ずっと心臓が鼓動していることを表現した林佐知子さんの詩です。『「生きている」と感じる時』は、出産を撮ることをライフワークとするフォトグラファー繁延あづささんの文章です。繁延さんは、どんなときも「生きている」と感じる姿を見て尊いと思う自分でありたいと願い、そう感じられる写真を撮りたいと言っています。授業では、繁延さんが「私も生きよう」という思いがどこから生まれるのかについて探り、テーマについて考えました。

●● ●●さん

生きていてよかったと思えるような行動をしたいなと思った。

●● ●●さん

生きていることは、当たり前ではないのだなと改めて実感した。生きたくても生きられない人がいるから生きるとよく聞くけど、よく分からない。自分は自分のために生きて、その中でも何か人のためにできることをやりたい。

●● ●●さん

命は大切だと思いました。生きてる時は、いつ死がくるかは分からないと思いました。命は全部輪っかのように繋がっていると思った。

●● ●●さん

誰かが必死に生きているかもしれない今、自分も頑張ろうという思いなどをもって過ごしていきたい。

●● ●●さん

「生きる」ということは「死ぬ」があるから、それは天秤にかけているようなもので、いつも交互にどちらかにゆっくりと傾いているのかもしれない。人は必ず高齢まで生きられるとは限らないから、その日その日の1分1秒を大切にしたいと思った。

●● ●●さん

生きているのは当たり前、当然なのではなくて誰かに守ってもらって生きている。事故や事件に遭わずに生きているというのは、日々の幸運の積み重ねなのだと思った。

●● ●●さん

今生きているということは、自分も必死に生まれてきたのだと思う。多くの人に生きさせてもらっているということを意識しながら生きたい。

